

『源氏物語』 夕霧卷の「数ならぬ」表現の和歌をめぐって

近藤 美奈子

鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかすふる涙かな

鞍負命婦（前）

桐壺更衣の母君

『源氏物語』には和歌が七九五首ある。これらの和歌を読んでいる気が付いたことがある。贈答歌でもないのに和歌中に用いられている語が共通しているものが存在していることである。それはどういう理由によるのか、考えてみたい。

例は桐壺巻にある。桐壺更衣の死後、桐壺帝が勅使として遣わした鞍負命婦と桐壺更衣の母君との別れに際しての名残の尽きない場面があるが、そこでは次のような和歌の贈答が行なわれた。

その夜は月が美しく、帰参した鞍負命婦からの報告を聞いた桐壺帝は桐壺更衣への深い哀傷の思いで過（前）こしておられたが、その気持ちと逆撫（前）でするかのように弘徽殿女御は夜更けまで管弦の遊びをしていた。月も沈んだ。帝は次の和歌を詠み、桐壺更衣の母君邸を思いやりながら起きておられる。

雲のうへもなみだにくるる秋の月いかですむらん浅茅生の

やど

上掲の桐壺更衣の母君歌と桐壺帝歌とは傍線部の「浅茅生、露一涙、雲の上」の語が共通しているが、贈答歌ではない。では、なぜ共通する語が用いられているのであろうか。

この点に關し、小町谷照彦氏は桐壺帝歌について次のように述べておられる。

独詠的な形をとっているが、内容的には賀負命婦と母君とが詠み交した別れの贈答への唱和であろう。「雲のうへ」「浅茅生」という歌語からすれば、母君の歌に対する返歌といつてもよい。

御説の通りで、そのように解釈すべきであり、読者もそのように鑑賞しているものと思われる。ただ確認しておきたいのは、そのように解釈しても物語叙述における矛盾はないのかということである。すなわち、なぜ賀負命婦と桐壺更衣の母君との別れの場面における贈答歌をその場に居なかつた帝が知っていたのか、また、知っていたと解釈しても物語内において矛盾はないのであろうか。

さて、物語を文章に沿って読んでみると、賀負命婦参後の場面に「いとこまやかにありさま問はせたまふ。あはれなりつ

ること、忍びやかに奏す。」との記述があるので、私人としてはなく勅使として桐壺更衣の母君邸を訪れた賀負命婦が帝に其処での出来事を漏らさず報告していたのだと読み取ることが可能である。したがって、帝は桐壺更衣の母君歌を賀負命婦から聞いて知っており、それに対しての返歌の如くに自身の歌を詠まれたのだと解釈して不都合はない。

とすれば、この例は贈答歌そのものではないけれども贈答歌に准じるものと考えられるので、二首間に同じ言葉が用いられていても何ら不思議のないものであった。

ところが、この例とは異なり、贈答歌に准じるものでもないのに二首間によく似た言葉が用いられている歌が他にもある。以下、その理由や表現効果などについて探ってみたい。

二

夕霧巻において、夕霧が亡き柏木の妻であった落葉の宮と結婚してしまったので、妻の雲居雁は居たたまれなくなり致仕の大臣邸に里帰りをするが、娘を思う大臣は、息子で、雲居雁の弟に当たる蔵人少将を使いとして落葉の宮に次のように手紙を遣わした。

大殿、かかる事を聞きたまひて、人笑はれなるやうに思し嘆く。兼在の言「しばしはさても見たまはで。おのづから思ふところものせらるらんものを。女のかくひききりなるも、

かへりては軽くおぼゆるわざなり。よし、かく言ひそめつとならば、何かはおれてふとしも帰りたまふ。おのずから人の気色心ばへは見えなん」とのたまはせて、この宮に、藏人少将の君を御使にて奉りたまふ。

A

兼在の言「契りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふうらめしと聞く
なほえ思し放たじ」とある御文を、少将もておはして、ただ入りに入りたまふ。

自家の権勢を笠に着たふてぶてしい態度の藏人少将によつてもたらされた、この大臣の手紙は落葉の宮にとつて「御返りいと聞こえにく」いものであったが、代筆で済ますこともできず、やっとの思いで返歌をしたためた条は次の通りである。

・・・(前略)・・・と思ひ出でたまふに、涙のみつらきに先だつ心地して、書きやりたまはず。

B

兼在の言何ゆるか世に教ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしとも聞く
とのみ、思しけるままに、書きもとちめたまはぬやうにて、おし包みて出だしたまうつ。

続いて、実家に帰つたままの雲居雁の許へ夕霧の愛人である藤典侍(惟光の娘)から手紙が届く場面が変わる。

いとどしく心よからぬ御気色、あくがれまどひたまふほど、大殿の君は、日ごろ経るままに思し嘆くことしげし。典侍かかる事を聞くに、我を世とともにゆるさぬもののにたまふなるに、かく侮りにくきことも出で来にけるを、と思ひて、文などは時々奉れば、聞こえたり。

C

兼在の言教ならば身に知られまし世のうきを人のためにも誦らす袖かな

なまけやけしとは見たまへど、ものあはれなるほどのつれづれに、かれもいとただにはおほえし、と思す片心ぞつきにける。

D

兼在の言人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを

とのみあるを、思しけるままとあはれに見る。

三

A歌―B歌、C歌―D歌がそれぞれ贈答歌であるが、注目すべきは、B歌とC歌とを見比べると、贈答歌ではないにもかかわらず、その用語が似ていることだと思われる。傍線部を見ると、B歌の「世、数ならぬ、身、うし」に対して、C歌も「世、数ならば、身、うさ」の語が用いられている。B歌とC歌とは詠まれた場面も詠者も異なっているのに用語が似過ぎていのである。それをどのように考えたらよいのであろう。

ところで、B歌とC歌とに共通している語のうち、「数ならぬ身」「数ならば身(に)」という語はそれぞれの歌の眼目であると考えられ、単に用語が似ていることばかりでなく、むしろ両歌ともに自分自身を「数ならぬ身」と捉える立場で詠まれているという点に注目すべきだと思われる。念のため、「数ならぬ」を『日本国語大辞典』で引いてみると、

数えたてて、とりあげるほどの価値はない。物の数ではない。とるに足りない。つまらない。かすにもあらず。

と記されているが、B歌はA歌に対して、C歌はD歌に対して自身を「数ならぬ身」と卑下する立場から詠まれているので、先ずA歌―B歌、C歌―D歌の贈答歌について見ていきたい。

大臣歌Aは、玉上塚彌氏が『源氏物語評釈』(以下、「評釈」)の「語釈」に、

息子の柏木の嫁という考え方からは「あはれとおもふ」。娘の雲居の雁が家を飛び出した原因があなただと聞くと「うらめしときく」というのである。自分の二人の子供、男の子の嫁だと思ふと可愛いし、女の子を不幸にした相手だと思ふと憎いという意味。

と注し、また「鑑賞」の中でも、

歌がひどい。「あはれと思ふ」長男の未亡人だから。「うらめしと聞く」娘の婚を横取りしたから。それで「君を心にとどめおきて」忘れられない。つまりは「ちぎりあれや」である。前世からの縁が今生に続いているのさ。そちらも「なほへほかの男のものとなった今も」え思しはなたじへわたしを忘れはすまい。前世からの縁があるらしいからな。と記されているように、随分言いくいことをぶしつけに詠んだ歌である。このような歌を落葉の宮に送りつけて圧力をかけようとする大臣の行動は、雲居雁が父大臣邸に里帰りしてしま

ったことを聞いた夕霧が雲居雁と大臣について「さればよ。いと急にものしたまふ本性なり。この大殿も、はた、おとなおとなしうのどめたるところさすがになく、いとひききりに、はなやいたまへる人々にて、めざまし、見じ、聞かじなど、ひがひがしき事どもし出でたまうつべき」と評していた性格から発していると思われる。

この夕霧の言の中でも「はた、人々」（傍線部）と記されている如く大臣と雲居雁とは似た性格の人物とされているが、特に「ひききり（せつかち）」という語は、A歌の直前傍線部、大臣が雲居雁の行動を諷める言の中でも用いられており、この辺りの叙述について玉上氏は『評釈』の「鑑賞」で、

……（大臣は）「人わらはれなるやうに思し嘆く」。しかし、大将の心配したほど行動的でなかった。娘をたしなめる。そして「女のかくひききりなるも、かへりては軽くおぼゆるわざなり」と叱るところがおもしろい。夕霧は大臣を「ひききり」と言い、大臣はその娘を「ひききり」という。どっちも「ひききり」なのだろう、と、そう読者は思う。読者にそう思わすつもりで、作者はこの言葉を使ったのだ。

と傾聴すべき指摘をされている。大軒史子氏も、「ひききりな

り」の『源氏物語』中の用例三例のうち二例がこの例であることから「致仕大臣と雲居雁父娘の近似性が『ひききりなり』に露呈していると見られよう。」と、玉上氏と同趣旨の発言をしておられる。

さて、大臣と雲居雁とが似た性格の人物として造型されているという点については、和歌の例も付け加えられるのではなからうか。落葉の宮の母御息所の逝去後に、夕霧と宮との仲を疑う雲居雁が子供を使って夕霧に渡した歌は、次の通りである。

E あはれをもちかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡きや
かなしき

この歌の下旬は対句仕立てになっているが、同じく大臣歌Aの下旬も対句仕立てになっている。作者は意識的に大臣歌Aの下旬と雲居雁歌Eの下旬とに同様の修辭法を用いたのではないだろうか。「ひききり」な性格が似ている大臣と雲居雁、A歌を讀んだ読者は少し前の場面にあったE歌を思い起し、歌の詠み振りまで似た父娘だと思ふであろう。作者は、そのように意圖したのではないかと思われる。

次に、大臣歌Aに対する落葉の宮の返歌Bについてであるが、

B歌「何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしとも聞く」の下旬がA歌「架りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふうらめしと聞く」の下旬を受けていることは諸注の指摘する通りである。その中で、次に掲げる『玉の小櫛』の指摘は詳細且つ的確だと思われる。

かざならず、たゞ一つの身なるを、といふ詞のしたてなり、さて四の句は、うらめしときくと有しをうけ、結句は、あはれと思ひと有しをうけたり、

B歌が「数ならぬ」―「ひとつ」という言葉の対比による修辭で詠まれたものであるという指摘も和歌一首の理解の上からは重要であるが、それよりも、A歌の四句「あはれと思ふ」に対しB歌が結句で「かなしとも聞く」と受け、A歌の結句「うらめしと聞く」に対してB歌が四句で「うしとも思ひ」と受けているという指摘は、落葉の宮歌が単に大臣歌の下旬を受けて詠まれたというだけでなく、受け方にもひとひねり工夫がなされていることを指摘したもので有益だと思われる。大臣歌は宮に対して「あはれ」という気持ちの主であることを「思ふ」によって現わし、「うらめし」という気持ちが従であることを「聞く」によって表現したものであるが、落葉の宮は大臣の本心は逆であることを感じ取った。そこで、権勢のある大臣（家）に

「うらめし」と思われる我が身は―「数ならぬ身」、また母御息所を喪つて頼るものとして無い心細い我が身は―「ひとつ」、そのような「数ならぬ身ひとつ」である我が身に対する大臣の本心は「うしとも思ひ」が主で「かなしとも聞く」が従であるを受け止め、どのような理由で、権勢のある大臣（家）にとつて物の数でもない私一人を相手に、憎らしく氣にいらぬと思ひになったり、いたわしいとお聞きになったりするのでしようか、と「思しけるままに」詠んだというのがB歌である。「思しけるままに」によってB歌が宮の正直な気持ちであることが分かり、宮の置かれた境遇の辛さ哀しさが「数ならぬ身ひとつ」に表現されていると思われる。

四

C歌を詠んだ藤典侍は、光源氏の乳母子惟光の娘で夕霧の妻の一人である。藤典侍についての説明がD歌の後に続いている。

この、昔、御中絶えのほどには、この内侍のみこそ、人知れぬものに思ひとめたまへりしか。事あらためて後は、いとたまさかに、つれなくなりまさりたまうつつ、さすが

に君達はあまたになりにけり。

夕霧と雲居雁との恋愛が暗礁に乗り上げていた頃、夕霧が五節の舞姫に選ばれた藤典侍を見初めて以来、二人の夫婦関係は絶えることなく細く続いてきたのであった。この叙述に続いて、雲居雁腹に七人、藤典侍腹に五人の子供があり、皆美しく魅力的に成長している中にも特に藤典侍腹の子供は容貌が美しく機転もきいて才気があり、三の君と二郎君は花散里に大切に育てられており、院（光源氏）も可愛がっていると記されている。因みに、藤典侍腹の子供を花散里が育てていることは若菜下巻に既に書かれていた。

ここには、身分が低く正式の妻でこそないけれども夕霧との間に五人もの子供をなし、夕霧の一族にも認められているという、それなりに安定した立場にある愛人として藤典侍は描かれている。

さて、C歌「数ならば身に知られまし世のうさを人のためにも濡らす袖かな」は一段と身分の低い藤典侍が落葉の宮事件によって心痛の雲居雁の許へ贈った歌であるが、『評釈』の「語釈」には、

「数ならば」は人数に入る、一人前。ここでは正式に結婚していることを言う。そうでないからあなたの為に泣くば

かりだの意。

と、また『全集』の頭注には、

初二句に、夕霧との仲が不満でも、自分には一人前に怒る資格はないと思ひ今日までこらえてきた、の意をこめた。

「人」は雲居雁。

と注されている。C歌は、雲居雁との身分差を前面に押し出しながら仮定条件で「数ならば身に知られまし」と詠んだところに、皮肉な第三者的気楽さが感じ取れる。また下句「世のうさ（夫婦仲の辛さ）を人（雲居雁）のためにも濡らす袖かな」からも、「世のうさ」は自分とは関係ない他人事だという口吻が感じ取れる。表面は雲居雁への同情であるが、その裏に身分差故に侮られて来たことへの恨みもこもっていると諸注が指摘する通り複雑な思いのこもった歌である。それを敏感に感じ取ってか、雲居雁も「なまげやけし」と少々気に障ってはいるが、藤典侍も落葉の宮に対して何とも思っていないわけがなからう、と思つて藤典侍に返したのがD歌である。

D歌「人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを」は『全集』の頭注に指摘されているように、C歌の「人のためにも濡らす袖かな」に対応して詠まれたもので、使用している「人、世、うき、身」という語もC歌の用語に緊

密に対応している。その詠まれた内容は、歌の後に藤典侍の感想として「思しけるまま」とあるように、雲居雁の本心そのままであると思われる。今まで、藤典侍のような相手にもならぬ身分違いの愛人はともかくとして、夕霧の唯一人の妻として幸福に暮らしてきたのに、ここにきて同情の目で見ていた他人の夫婦仲の辛さを自身が経験するとは思わなかったというのである。過去の助動詞「き」を二度用いて、夫婦仲の悩みのなかった昔と辛い思いをしている今とを対比させた悲哀感漂う歌である。決して「全集」の頭注が「それほどまでご同情くださるとはご親切なことね。見くだしている者から受ける同情にはこりを傷つけられて、反発する。」と言っているような歌ではないと思うけれども、やはり、上句にある如く今まで夫婦間の悩みは他人事だと思つて暮らしてきた女が「思しけるまま」に詠んだという愛すべき無神経な傲慢さのようなのは感じられる。今でこそ地位を脅かされかかっているとはいへ、夕霧の北の方としてのゆるぎない地位に胡坐をかいてきた雲居雁らしい歌の詠み振りといえよう。

五

さて、今までA歌―B歌、C歌―D歌の二組の贈答歌がそれぞれ贈答歌としての緊密な対応性のあることを見てきたが、次に、物語のなかで隣に位置しているB歌とC歌とが贈答歌でないにもかかわらず用語が似ていることについて考えてみたい。

物語中の和歌を読む時に我々がとるべき基本姿勢は、鈴木日出男氏が「源氏物語の和歌」という御論の冒頭で、

物語中の和歌は当然のことながら、作者や語り手によってではなく、すべて作中人物によって表出されている。したがってそれが、互いに詠み交わされる贈答や唱和であれ、またひとりで詠まれる独詠であれ、それを詠む任意の作中人物の表現であるとして把握されねばならない。…(中略) …

作中人物たちの詠む和歌についても、他の人物と固有の関係を構成する点にまず注意されるべきである。

と述べておられる通りだと思ふ。今までA歌―B歌、C歌―D歌の二組の贈答歌について見てきたのも、この観点からである。

しかし、物語中の和歌を「作中人物の表現である」として把握する立場にいる限り、B歌とC歌の用語が似ている点は説明が

つかないと思われる。作中人物が詠んだ歌として見れば、前述のようにB歌もC歌も物語の中で互いに関わりなくそれぞれの位置における役割を果たしているといえる。「作中人物の表現であるとして把握」する立場からは、単に落葉の宮歌Bと藤典侍歌Cが似ている、二人が似た表現の歌を詠んでいるという以上に発展はしない。ここは、「作中人物の表現であるとして把握」すると同時に作中人物にそのように詠ませた作者の表現意図というものを考える必要があろう。

そこで、問題になるのはB歌に続いてC歌が置かれていることである。B歌がその位置にあるのは、A歌の返歌なので問題はない。しかし、致仕の大臣と落葉の宮の贈答歌の場面が終わって次の場面になったところに、B歌に似た表現のC歌が置かれていることの意味は問われねばならないと思われる。藤典侍から雲居雁への贈歌としてはC歌以外の別の歌を詠ませることもできたのに、あえてC歌を詠ませたのは何故であろうか。

似た歌を近くに並べるといことは、やはり比較対照させるという意図があると思われる。B歌もC歌も自身を「数ならぬ身」と捉えている歌である。しかし、詠んだ主体、詠まれた内容の違いによって、両歌から受ける印象はひどく異なる。B歌からは、複雑な人間関係のもと権勢家の致仕の大臣から贈られ

た手紙（A歌）を前にして自身の頼りなさ小ささを実感として噛み締めている落葉の宮の姿が浮かんでくる。それに対してC歌の方は、夕霧の妻妾の一人とはいえ、もともと身分も低く、初めから落葉の宮や雲居雁とは同じ土俵上がれぬ、「愛人」がそれなりの安定を得て、観客として土俵上を見ているという、藤典侍のいかにも第三者的な姿が浮かんでくる。藤典侍が自身を「数ならぬ身」と捉えるのは身分からすれば当然であるが、皇女である落葉の宮が自身をそう捉えねばならないところに宮の置かれている状況の苛酷さが窺われる。小野の山荘に夕霧が泊まったことを律師が一条御息所に話す中で夕霧と落葉の宮との結婚に反対し、その理由を「本妻強くものしたまふ。さる時にあへる族類にて、いとやむことなし。若君たちは七八人になりたまひぬ。え皇女の君おしたまはじ。」というように、結婚以前から致仕の大臣家が落葉の宮の前に立ちふさがる大きな存在であることが分かっていた上に、ただ一人頼りにしていた母御息所を亡くした今、非力な落葉の宮は自身を「思しけるまま」「数ならぬ身」と捉えざるをえないのである。B歌の後に、同様の表現を用いながらも悲哀や苦悩の切実感の薄いC歌を置くことによって、B歌の落葉の宮の深刻な苦悩がより強く照らしだされていると考えられる。

そして、藤典侍歌Cに続いて雲居雁歌Dを置くことによつて、夕霧の妻妾三人の力関係や苦悩の深さを対比させている。実は、和歌自体の対比関係は、前述のB歌―C歌、贈答歌のC歌―D歌ばかりでなく、B歌―D歌にも認められる。B歌とD歌とは、両者共に「思しけるまま」に詠んだと記されており、落葉の宮と雲居雁の本心が吐露された歌として二首を対比させようとしている作者の意図が窺われるのである。

雲居雁は夕霧の落葉の宮に対する恋愛沙汰によつて疑い、悩み、嘆いたが、D歌を詠んだ辺りでは嘆きつつもその嘆きは落ち着いたものになっているように思われる。そもそも夕霧の態度に疑惑を深めていた頃の雲居雁の嘆きは、

もとよりさる方にならひたまへる六条院の人々を、ともすればめでたき例にひき出でつつ、心よからずあいだちなきものに思ひたまへる、わりなしや、我も、昔よりしかならひなましかは、人目も馴れてなかなか過ぐしてまし。世の例にもしつべき御心ばへと、親はらからよりはじめたてまつり、めやすきあえものにしたまへるを、ありありては末に恥ぢがましき事やあらむ

と記されているように、夕霧が妻妾仲良く暮らしている六条院を引き合いに出して自分を非難するのに対して、昔からそらい

う生活に慣れていたら世間も自分も取り立てて問題にすることもなく過ごせるだらうとか、これまで夕霧が世の男たちとは違つて自分一人だけを妻として大切にしていたことを親兄弟を始めとして世間の人々も称賛し、自分も果報者とされてきたのに今になって恥さらしになるのだらうかとかいふ嘆きで、特に傍線部に端的に示されているように、対世間的な意味合いが強いように思われる。夕霧が強引に落葉の宮と結婚して以前からの夫婦であつたかのような態度をとつたときは、雲居雁もさすがに「さしもやはとこそかつは頼みつれ、まめ人の心変わるはなごりなくなむ、と聞きしはまことなりけり」と「まめ人」夕霧の心変わりに絶望して実家の大臣家に帰つてしまふ―それでも女房の目を意識して方違へに言寄せたものであつた―が、それに対して夕霧は手紙を何度もやつて迎えようとしたり、返事がなければ大臣の手前もあるけれども自ら雲居雁の所へ出向いて行つたりしているので、雲居雁は長年一緒に暮らしてきた夕霧の自分に対する愛情と執着とを十分に感じ取っているはずで、妻の地位を追われるというような悲壯感はないと思われる。大臣にしても、A歌の場面に「大殿、かかる事を聞きたまひて、人笑はれなるやうに思し嘆く。」と記されていたように、対世間的に嘆いているのである。雲居雁は今までの人も羨む世にも

稀な唯一の妻という立場から世間一般の妻の立場に墜ちたのであり、それは面目なく外聞の悪いことではあるが、妻の座を失うというような切羽詰まったものではない。また余裕があるのである。それがD歌に現われていると思われる。「思しけるまま」に詠んだD歌は確かに悲痛な歌ではあるが、その詠歌内容は、思いがけず自分が他人と同等（の辛い立場）になったことを嘆くもので、自身を高みに置くことに慣れた人物の詠み振りと言えよう。

このように夕霧卷の卷末に、「思しけるまま」に詠んだ落葉の宮歌B、贈答歌ではないのにB歌によく似た表現の藤典侍歌C、C歌への返歌であるとともに、B歌と同じく「思しけるまま」に詠んだ歌という性格付けがなされた雲居雁歌Dを並べることにより、夕霧の事件を聞いた紫の上の心中思惟「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし。・・・」と照応して、夕霧の妻妾の三者三様の立場を対照させてより鮮明に読者に印象付けるといふ作者の表現意図があると思われるのである。

注

1 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛

校注・訳『日本古典文学全集』（小学館、昭和四五年、

一月〜昭和五一年二月）に拠り、傍線は稿者が施す。以下、『全集』と略称する。

2 『源氏物語の歌ことば表現』（東京大学出版会、昭和五九年、八月）、一〇四頁。

3 『日本国語大辞典』（小学館、昭和四八年、七月）

4 玉上琢彌著『源氏物語評釈』第八卷（角川書店、昭和四二年、三月）

5 大軒史子「雲居雁」（『源氏物語講座』第二卷「物語を織りなす人々」、勉誠社、平成三年九月）

6 本居宣長著『源氏物語玉の小櫛』（『本居宣長全集』第四卷、昭和四四年、一〇月）

7 『源氏物語の探求 第五輯』（風間書房、昭和五五年、五月）